

上郡町の偉人

大鳥圭介

「鵬程万里」第一回

著者 中川由香

「鵬程万里」は、遙か遠い道程を意味する。無限に広がる大海や、前途が洋々としている事でもある。「鵬」は空想上の巨大な鳥のことだ。何キロメートルもある背を持ち、九万里（約四十九キロメートル）※古代中国では一里＝0.54キロメートルの上空に飛び上がるといふ伝説を持つ。

大鳥圭介の生涯について全てを記述することは、まさにこの「鵬程万里」の観がある。また圭介自身も、故郷上郡を出立し大阪や江戸へ向かう際に、この想いを抱いたのではないか。圭介ほどあらゆる分野に強い好奇心を持ち、全力で取り組み、失敗も絶望も経て、生涯に渡り世に貢献し続けた人間は、歴史上でも稀有だ。その活動や功績の一つ一つを記述するのは簡単ではない。第一回目は、この大鳥圭介の名前について詳しく触れてみたい。

圭介の生まれた上郡の石戸は、当時石堂と書かれ、細念村という村に属した。石堂の住民の姓は皆、雌鳥と大鳥だった。大鳥は雄鳥から変化したと推測される。圭介の先祖に四方田政綱という、鉄砲の奥儀を極め、藩の役人にも尊敬され恐れられた人物がいた。四方田の姓は小林に変わった。小林家に五郎兵衛という人がいた。この人物は医者であるが、鉄砲の名人で赤穂にも知られていた。圭介は、医師を学びながら砲学、即ち鉄砲や大砲を学んでその大家

になったから、先祖の轍を踏んだと言える。この小林家が大鳥に姓を変え、上郡の室井氏から養子を迎えた。これが圭介の祖父純平だ。漢学に秀でた純平は圭介に儒学を教え、姫路へ連れて行き世界の広さを実感させた。ここで圭介少年は、鴻鵠の志を抱いた。「鴻鵠之志」とは、大人物の遠大な志のこと。「鴻」はおおとり、「鵠」はくぐい。双方大きな鳥であり、大人物を例える言葉でもある。圭介は江戸で幕府に取立立てられた、つまりキャリア官僚になった。鴻漸の翼のごとく出世した。「鴻漸之翼」は、飛翔すれば一気に千里を進むと言われる鴻の翼のこと。転じて出世し大事業が成功する人物を指す。

圭介は、「おおとり」という姓の意味が気に入っていたようだ。特に若い頃、父や適塾の先輩大村益次郎（兵学者、明治陸軍の祖）への手紙で「鵬圭介」と自分の名を記している。圭介が地球儀の使用法を記した「地球儀用法」では「九萬生大鳥圭」、また陸軍の野外戦闘方法を記した「野戦要務」では「九萬生大鳥圭介」とそれぞれ訳者名を示している。「九萬生」は鵬が九万里の高さに飛翔することが由来だろう。

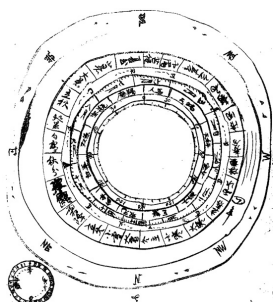
また、圭介が江川塾で講師をしていた時「扶搖堂」と号して厚く書生を導いたと幕末の東西新聞に掲載されていた。扶搖は暴風、つむじ風の意味である。

李白の詩に「大鳳一日同風起扶搖真上九万里」とある。おおとりは、風を起こしつむじ風に乗る、九万里の上に飛翔する、というこの詩から取ったのだろう。圭介の深い教養と共に、遊び心が伺える。

圭介を「おおとり」と称したのは本人だけではなない。明治の文壇家高島監泉は、戊辰戦争期に人気があった圭介を「器量優れた元帥の命に従う兵士の方々は進退手足のごとくで、神出鬼没の駆引で、敵の寄せ手をなやませた。戦利の羽を伸ばす、北海に大鵬の名が高いのも道理だ」と記した。

さて、圭介の名前である。「圭」は古代中国で、上部が尖り下部が四角い玉器のことである。重量や容積の単位であり「計る」という意味を持っている。この事から「刀圭」は薬を盛るさじ、転じて医者への指す。また「土圭」は中国の日時計で、日本の「時計」の語源になった。一方「介」は間を取り持つ、助ける、という意味がある。世の事実と必要を計り、必要な技術を身につけ、世を助けた圭介の生き方が凝縮されているような名前だ。

名前に込められた意味は、人間の人格と器量を育てる。姓名共に、親から受け継いだ名に恥じぬ生き方をした圭介。名前が与える人格への影響とその大切さを、考えさせられる。



去政四年丁酉月海陽郡大鳥圭介自撰
地球儀用法の挿絵

↑「地球儀用法」の挿絵と圭介の自説